

大坪一夫 「センターと私」

私がセンターに日本語の講師として採用されたのは、1964年のことです。その頃のことを詳しく書くと、自分の恥をすべてさらしてしまう結果になるのですが、それを書き留めておかないと、当時のセンターの様子を歪めてしまうことになるので、あえて当時の私についての事実を書いてみようと思います。

当時の日本には、日本語の教員を養成しようとする人はいなかったように思います。そして、私も日本語教員としてのなにか特別の知識を備えた人間としてセンターに採用されたのではないことは確かなようです。ですから、はじめの数期間は、日本語の何を教えるのか、アメリカ人の日本語学習者にどんな苦労があるのかといった知識は皆無でした。ただ毎日周りの先生にこの教材の何をどう教えたらいいのかを伺って、恐るおそる教室へ向かうというのが実態でした。そんなとんでもない私に日本語教育の総てのことを教えてくださった周囲の先生方には、なんともお礼の言いようがありません。

周囲の優しい先生方とは打って変わって、私を強烈に鍛えてくれたのはセンターの学生たちでした。こちらがまったく気付いていないことを質問してくるので、たまったものではありません。あれには実にまいりました。ほとんど毎日のように学生に足をすくわれ、「それは、いい質問だ。今日は答えられないから、明日まで待ってくれ」と毎日繰り返していたのですから、よく学生たちが許してくれたものだと不思議に思うほどのひどさでした。よくもノイローゼにならずにいられたものだと、自分のタフさに今となっては呆れるばかりです。

そんなわけで、私には、自分はセンター製の日本語教員であり、父親はセンターの学生たち、母親は周囲の先生方という思いが強く残っています。

センターは、当時も運営のための資金には悩みつづけておりました。沈みそうな船から真っ先に逃げ出すのは卑怯であるということで、センターには1976年までお世話になったのですが、運営費問題もある程度解決した1976年に私は名古屋大学に職を得て、そちらに移りました。

なぜ日本の大学に出ていったかという、アメリカの大学が日本語教育についてこれだけの仕事をしているのに、日本の大学にセンター以上の働きをする機関があってもいいのではないか、そうじゃなければ、日本の大学での日本語教育に存在理由があるのかという、ある切羽詰まった想いと、俺にやらせれば、絶対にできるという若者に特有の思い上がった自負心からのことだったのです。

センターは、優れた日本語教員を多数日本の社会に輩出しました。ある人が「センターは、そのことにもっと誇りをもつべきだ。日本語教育の発展のために、センターが残した歴史を伝える義務があるのではないか」とおっしゃいましたが、自分が関係しているので、少々気恥ずかしい気がしないでもありませんでしたが、しかし、その評価は、間違いではないと感じております。もしそのような企画が立てられるようなことがあれば、なんらかのお手伝いはしてみたいと考えています。

(元センター言語課程主任、元名古屋大学・筑波大学・東北大学教授、現麗沢大学外国語学部教授、東北大学名誉教授)